

(様式1)

「未来の担い手育成プログラム研究校」実績報告書(2年次)

1 学校名等

学 校 名	京 丹 波 町 立 瑞 穂 中 学 校				校長名	武 永 吉 弘
研究教科・領域等	総 合 的 な 学 習 の 時 間					
研 究 主 題	未来を創造することを目指した「主体的・対話的で深い学び」の実現～課題解決型学習を活用した、地域の未来を考え、行動できる生徒の育成～					
研究の目的	激しく変化するこれからの社会では、新たな課題に対して既習の知識を活用すること、課題解決に向けての総合的な思考力・判断力・表現力(認知能力)を育成しながら、学びに向かう姿勢(非認知能力)をどう育成していくかが求められている。その基盤作りとして課題解決型学習を活用した研究実践を行う。					
学 年	1 年	2 年	3 年	特別支援	合 計	教職員数 ※校長・教頭を含む
学 級 数	1	1	1	0	3	1 1
児 童 生 徒 数	2 3	2 5	2 6	0	7 4	

2 研究校の概要

本校校区は、食材の宝庫を自認する自然豊かな地域である。その一方、昭和30年代には700人を超えていた全校生徒数が、本年度は74人となるなど、過疎化の課題と向き合っている地域でもある。生徒は、落ち着いた環境の下で学習や部活動に真面目に取り組むことができる。しかし、小・中学校ともに単学級のため9年間にわたって人間関係が変わらずに生活をしており、新たな場面で力を発揮したり、話し合うことで問題を解決し、トラブルを乗り越えたりする経験が少ない。

本町では、ユニバーサルデザインと授業改善の視点を踏まえ、児童生徒を学びの主体者とすることで学力の向上を目指す「学びを育む京丹波町メソッド」をベースとした授業改善の取組をすすめている。

こうした中、本校では、付けたい力を明確に「めあて」から「振り返り」まで一貫した指導を考えた授業づくり、環境面では、整った学習・教室環境づくり、学校生活でのルール明確化、提出物の指導や持ち物の管理、忘れ物への手立てなど、生徒と教師が相互理解と信頼を大切にした取組をすすめている。また、このような中で、生徒会本部を中心とした特別活動が活発になり、生徒一人一人が安心をして学べる環境の実現や、集団の育ちにつながっている。

3 主な研究活動

本事業の取組として①正解のない問いに対して粘り強く最適解を導き出そうと挑戦する。②生徒たちが興味・関心を高め、課題解決型学習に取り組むことにより「非認知能力」を育む。これらを通じ、③認知能力と非認知能力を相互に高め合う。という3つを柱に研究実践をすすめた。

特に課題解決型学習では、まずグループを作り、連携企業から出たテーマに対して課題を解決する方策を共同的に考えさせた。ここでは、考えた方策を具体化するための知的な活動と共に、工夫や粘り強さが必要となる。

次に、和食の老舗である連携企業「美濃吉」との間で、普段できない「本物」を体験し、生徒たちの興味・関心を高めることができた。

さらに、自分たちで考えたアイデアを段階を追って対話的に発表(アウトプット)させた。この活動は、課題解決に至るまでの過程を、根拠を示しながら、聞き手にわかりやすく伝えようとする中での学びの深まりに、また、質問に対して、調べたことを自分の言葉で返答しようとする中でのコミュニケーション能力の向上にもつながると考えた。

さらに本事業と並行して、課題解決の方法を考えたり、資料を読み込んだりするために必要な読解力や、認知能力を図る資料としてRST(リーディングスキルテスト)を行った。2年生では、文の意味を読み取る「係り受け解析」で、「文を読むのにつまずいている。」というレベル1の生徒が全体の30%を占め、「文の基本的な構造をつかむことに苦戦をしている。」というレベル2の生徒を入れると全体の60%となり、文を読み取る上での課題を示した。

これらの課題を示す本校生徒に対して、課題解決の手法や資料を読み込む力を高める活動（認知能力）と、学びへの関心や意欲を高め、コミュニケーション能力や自尊感情を高める活動（非認知能力）が、互いに絡み合いながら両面を育成する実践として本研究をとらえる中、本年度は、以下の取組を行った。

○7月20日（月）：本取組の趣旨説明、課題解決の手法を学ぶ。

連携企業「美濃吉」から出された「新しい和食を創造し、和食文化を広めてください」という課題に対し、4人グループ（6つの班）を作り、「和食の現状」「課題（なぜそうなっているのか）やニーズ（求められている物・こと）」、「誰に視点を当てて解決をはかるか（ターゲットの設定）」等、課題解決の手法を学ぶ。



○7月27日（月）：各班で現状を調べ、仮説を立て、テーマを決める。

資料や書物、インターネットから和食について調べる。その中で、和食の現状を理解し仮説を立てる。各班で調べるテーマを設定する。

○8月28日（金）：RST（リーディングスキルテスト）を実施する。

課題解決の方法を考えたり、資料を読み込んだりするために必要な読解力や認知能力を測る資料としてRST（リーディングスキルテスト）を行う。



○9月28日（月）：調べ学習①

各班のテーマに沿った調べ学習を行う。

○10月8日（木）：調べ学習②

各班のテーマに沿った調べ学習を行う。



○10月12日（月）：仮説をもとに発表、検証

各班で立てた仮説をもとに、発表し、その中で他者の意見を聞きながら、本当に正しく現状を理解できているかや、説得力のある根拠を示せているかなどを検証する。

○11月6日（金）：本物に触れる校外学習（美濃吉「竹茂楼」訪問）

本物の和食に触れる体験として、美濃吉「竹茂楼」を訪問する。

竹茂楼では、自分たちが考えた解決策を発表し、助言をいただいた。また、和食「京料理」を体験（試食）した。



○11月13日（金）：中間発表会（関係者を招きポスターセッションによる発表会）



各班が考えた「新しい和食を創造し、和食文化を広めてください」という課題に対する解決策（アイデア）を、根拠を示しながらポスターセッション形式で発表する。その中で聞き手からの質問や助言などに対するやりとりをしながら発表をすすめる。

○12月14日（月）：課題再検証

前時のポスターセッションを受けて、本当に「課題」や「ニーズ」を正しく理解できているか、解決策は実現可能かどうかなどを再度検証する。

○12月21日（月）：発表会に向けてのまとめ①

2月の「課題解決学習発表会」に向けて、資料を作成する。

○1月12日（火）：発表会に向けてのまとめ②

2月の「課題解決学習発表会」に向けて、資料を作成する。

○1月25日（月）：発表会リハーサル

各班が考えた「新しい和食を創造し、和食文化を広めてください」という課題に対する解決策（アイデア）を、根拠を示しながら発表する。聞き手になぜこの結論にいたったかを根拠を示し、伝える。

○2月12日（金）：発表会



学習のまとめとして、これまで調べたことを発表会で報告する。

4 今年度の研究の成果と検証

【成果】

- ・和食を代表する企業である「美濃吉」の方々と出会い、普段接することのできない本物に触れることで、学習意欲・活動意欲が増し、「正解のない問い」の解決に向け、試行錯誤を繰り返しながら粘り強く取り組む姿勢が育った。
- ・課題解決型学習の手法を学ぶことで、「相手を納得させるために必要なことは、しっかりとした根拠を示すことである」ということを実感し、自分たちが出した結論、それを導いた根拠や説明に対して、意見を求めたり、相手への質問を繰り返したりしながら、探究的なスタイルでの学習機会を作り出すことができた。
- ・ポスターセッションという対話形式の発表会をおこない、自分たちの言葉で相手にどのように伝えれば分かりやすいかを考え、コミュニケーション能力の向上に繋がった。

5 今年度の課題

- (1) 今年度、新型コロナウイルス感染症拡大防止による臨時休校等の影響で、限られた時間での取組となったため、期待される生徒の変容について検証ができなかった。
- (2) 課題解決型学習を取り入れた授業について、授業公開を含めた研究ができなかった。
- (3) 総合的な学習の時間で学んだ課題解決型学習の手法を、各教科での授業に活かせるよう、引き続き授業改善とカリキュラム・マネジメントをすすめる。

6 3年次の研究構想

- (1) 課題解決学習の3年目にあたり、本物と出会える環境設定、グループで共同的に学ぶこと、班発表やポスター発表など段階的に対話を重ねる中で学ぶことなど、深い学びの実現に向けて、この間の取組の成果を生かす。
- (2) 課題解決型学習に向けて、その基盤となる主体的な学びに向かう生徒の育成を目指し、「学びを育む京丹波町メソッド」をベースにした授業改善をさらにすすめる。
- (3) 総合的な学習の時間で活用した課題解決型学習の手法を、各教科の年間指導計画に効果的に取り入れるカリキュラムの編成を行う。
- (4) 本事業のように、本物にふれあう授業や、生徒が主体者となる学習、達成感を味わう経験など、こうした学習環境を通して高まった学習意欲や自尊感情などの「非認知能力」について、検証の方法を考えていく。
- (5) 引き続きRST（リーディングスキルテスト）を実施することで、課題解決の方法を考え、自分たちの主張を説得力あるものにするための資料を読み込む力、活用する力が向上しているかを検証する。